

二つの世界

—— *Pañcadaśī* 第四章 Dvaitavivekaprakaraṇa の分析 ——¹

眞鍋智裕

本稿の目的

インドにおいては、全ての生き物は死んだ後もまた別の／同じ生き物に生まれ変わり、またその後も死んでは生まれ変わりを繰り返していくという生命的な循環的世界観があることはよく知られている。一方で、様々な聖典においては、これらの生き物が生活している環境世界 (jagat) も、主宰神 (īśvara) によって創造され、持続され、破壊され、一定期間を経た後に、再び創造・持続・破壊 (janmasthitipralaya) され、この過程を繰り返していくことが述べられている²。これらのことは、インドにおける環境的な循環的世界観を示しているといえることができる。

インドにおけるほとんどの哲学的学派は、生命的な循環的世界観である輪廻転生の世界 (saṃsāra) から離脱 (解脱, mokṣa) することをその目的としており、本稿で取り上げるアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派 (Advaita Vedānta, 不二一元論学派、以後アドヴァイタ学派と表記) も、輪廻転生世界からの解脱を目的としている。アドヴァイタ学派は、精神的な根本原理であるブラフマン (brahman) のみの実在性を認め、それ以外の現象世界 (prapañca) の諸存在は実際には実在しない幻 (māyā) のようなものであるという厳格なブラフマン一元論を主張している。またアドヴァイタ学派は、このブラフマンのみが実在するという真実を知らないこと (無明 avidyā, 無知 ajñāna) で、本来実在しないはずのブラフマン以外の諸存在が構想され、そしてそれらに対して執着することで、本来はブ

¹ 本稿は、JSPS 科研費 21K12843 による研究成果の一部である。

² 『マヌ法典』 (*Manusmṛiti*) や叙事詩・プラーナ聖典群などにおいて世界創造と消滅のサイクルが説かれていることは有名である。渡瀬 [1990: 2-8], 定方[2011: 90-125], Brinkhaus [2016], Takahashi [2018/19] 等参照。

ブラフマンに他ならない自身（アートマン, ātman）が輪廻世界に束縛されて輪廻主体（saṃsārin, 個我 jīva）となってしまう、と考えている。またその反対に、彼らは、現象世界の諸存在が本来的には実在しない虚妄なものであり、ブラフマンのみが実在しており、自身はそのブラフマンに他ならない（梵我一如, brahmātmaikya）ことを正しく知ることによって輪廻転生世界からの解脱が達成される、と主張している。しかし、以上のように解脱が達成されない限りは、輪廻主体である自身は輪廻転生を繰り返していくうえに、本来実在しない現象世界も創造・持続・破壊の循環を決して止めることはない。

以上のように、アドヴァイタ学派の教学上、解脱のためにそれが本来実在しない虚妄なものであるということを知る必要があるという点で、多様な現象世界³は重要な位置を占めるものである。しかし、無明によって構想されたものと言われる現象世界は、各個我が真実を知らないことで、個我自身によって構想されていると理解できる一方、主宰神によって創造されたもの（創出されたもの sṛṣṭa）とも言われており、現象世界は諸個我によって構想されるものであるのか、主宰神によって創造されるものであるのかという問題が生じる⁴。この問題を解決するため、14世紀頃に活動したアドヴァイタ学派の思想家であるバーラティーティールタ・ヴィディヤーラニヤ（Bhāratīrtha Vidyāranya, 以下ヴィディヤーラニヤと表記）⁵は、現象世界を「主宰神によって創出された」（īśvaraṣṛṣṭa）世界と「個

³ これ以降本稿では、環境世界だけではなく、個的な精神原理である個我が内的なものであるのに対して、外的なものという点から生き物の身体も含めて現象世界という語を使用する。

⁴ 執筆者は、この問題の淵源は、ウパニシャッド聖典群においてアートマンによる世界創造とブラフマンによる世界創造の両方の考え方が見られることにありと考えている。ウパニシャッド聖典群におけるアートマン論とブラフマン論はその萌芽期においては別の理論であり、ブラフマン一元論に立脚するアドヴァイタ学派において、それら両理論をどのように一元化するかというウパニシャッド解釈学上の問題の、特に世界創造に関する論題が、この個我（アートマンに相当）による創出と主宰神（ブラフマンに相当）による創出の一元化という問題なのである。

⁵ 「ヴィディヤーラニヤ」については、バーラティーティールタ・ヴィディヤーラニヤと、彼の弟子であるマダーヴァ（Mādhava）・ヴィディヤーラニヤという二人のヴィディヤーラニヤが存在している。PDの作者は、現在の研究ではバーラティーティールタ・ヴィディヤーラニヤであると考えられている。Gooding [2002: 6-9], Prem Pahlajrai

我によって創出された」(jīvasṛṣṭa) 世界との二種に分類した。本稿では、ヴィディヤーラニヤが二つの世界について詳細な議論を行っている、彼の著作『十五章篇』(*Pañcadaśī*, PD) の第四章「二元〔世界〕の識別章」(*Dvaitavivekaprakaraṇa*) を分析することで、主宰神によって創出された世界と個我によって創出された世界とが、それぞれどういったものであるのか、またこれら二つの世界はどういった関係にあるのか、ということを検討する。そして、これらの作業を通じて、ヴィディヤーラニヤは、諸個我の輪廻転生世界への束縛と解脱をどのように説明しているのか、ということをも明らかにしたい。

なお、PD は全編韻文で著述されており、PD だけでは議論の詳細が追えない箇所も多い。PD に対してはいくつかの註釈が著わされているが、本稿ではヴィディヤーラニヤの直弟子⁶とされるラーマクリシュナ (*Rāmakṛṣṇa*, 14 世紀頃) による註釈 *Padadīpikā* (PDī) の記述を参照し、PD の解説・分析を行う⁷。

1. 主宰神によって創出された世界と個我によって創出された世界

1.1 二つの世界とその関係性

ヴィディヤーラニヤは PD 第四章の冒頭詩節において、主宰神によって創出された二元 (*dvaita*) 世界、つまりブラフマン一元ではない多様な現象世界と、個我によって創出された多様な現象世界とを識別することで、個我によって捨て去られるべき束縛の原因たる現象世界が明瞭となる、

[2005] 参照。また PD 作者の弟子とされるラーマクリシュナも、PD の作者としてバーラティーティールタ・ヴィディヤーラニヤの名前を挙げていることから、本稿でもバーラティーティールタ・ヴィディヤーラニヤが PD の作者たるヴィディヤーラニヤであると考え。PDī 107,2f.: *natvā śrībhāratīrthavidyāranyamunīśvarau // mayā dvaitavivekasya kriyate padayojanā // 1 //* (幸いなるバーラティーティールタ・ヴィディヤーラニヤ仙と主宰神に敬礼してから、「二元の識別〔章〕」についての『パダヨージャーナー』が私 (ラーマクリシュナ) によって作られる)。

⁶ Mahadevan [1938: 5], Nachane [2000: 303] 参照。

⁷ なお、PD の和訳に際しては、Dhole [1899], Shastri [1954], Swāhānanda [1967] を参考にした。また、PD の 4 詩節以上の和訳を提示する際に、その和訳に対応する PD の詩節番号を付加してある。

すなわち個我によって現象世界が捨て去られるべきことが確定される、と述べている⁸。この言明からすると、PD 第四章の著述目的は、現象世界を分析することで、その現象世界が輪廻転生世界への束縛の原因であること、また現象世界が我々個我によって捨て去られるべきことを確定することにあることが理解される。

続く PD 4.2 から 4.9 では、ヴィディヤーラニヤは、世界の根本物質である幻力 (māyā) によって制約を受けたブラフマンである主宰神が世界の創出者であることが、四ヴェーダ全てにおいて説かれている、ということを示すため、各々四ヴェーダに所属する、主宰神による世界創出が説かれた諸ウパニシャッド文を列挙する⁹。さらにヴィディヤーラニヤは PD

⁸ 以下の PD 4.1 とそれに対する PDī を参照。īśvareṇāpi jīvena sṛṣṭam dvaitam vivicyate / viveke sati jīvena heyo bandhaḥ sphuṭībhavet // (主宰神によって、また個我によって創出された二元が識別される。[二元の] 識別がある時、個我によって捨てられるべき束縛が明瞭となろう)、PDī 107,10-12 (on PD 4.1): **viveke sati jīveśvarasṛṣṭayor dvaitayor vivecane kṛte sati jīvena pūrvoktena heyaḥ parityājyo bandho bandhahetur dvaitam sphuṭībhavet spaṣṭatām gacchet, etāvajjīvena heyam iti niścīyata ity arthaḥ** ([二元の] 識別がある時、すなわち個我によって [創出された、また] 主宰神によって創出された二元を識別することが為されている時、前述の個我によって捨てられるべき、すなわち放棄されるべき束縛、すなわち束縛の原因である二元が明瞭となろう、すなわち明瞭性に達しよう、以上のような個我によって捨てられるべきである、と確定される、という意味である)。

⁹ PD 4.2-9: māyām tu prakṛtiṃ vidyān māyinaṃ tu maheśvaram / sa māyī sṛjātīty āhuḥ śvetāśvataraśākhinaḥ // 2 // ātmā vā idam agre 'bhūt sa īkṣata sṛjā iti / saṃkalpenāsṛjal lokān sa etān iti bahvṛcāḥ // 3 // kham vāyavagnijalorvyoṣadhyannadehāḥ kramād amī / saṃbhūtā brahmaṇas tasmād etasmād ātmano 'khilāḥ // 4 // bahu syām aham evātaḥ prajāyeyeti kāmataḥ / tapastaptvāsṛjat sarvaṃ jagad ity āha tittiriḥ // 5 // idam agre sad evāsīd bahutvāya tad aikṣata / tejo'ban nāṇḍajādīni sasarjeti ca sāmagāḥ // 6 // visphulingā yathā vahner jāyante 'kṣaratas tathā / vividhāś cijjaḍā bhāvā ity ātharvaṇikā śrutiḥ // 7 // jagad avyākṛtaṃ pūrvam āsīd vyākriyatādhunā / dṛṣyābhyām nāmarūpābhyām virāḍādiṣu te sphuṭe // 8 // virāṇ manur narā gāvaḥ kharāśvājāvayas tathā / pipīlikāvadhidvandvam iti vājasaneyinaḥ // 9 // (原質を幻力と、一方、偉大な主宰神を、幻力を持つ者と知るべきである。その幻力を持つ者(主宰神)は [この全てを] 創出する、とシュヴェーターシュヴァタラ派の者たちは述べた。[第2詩節] 太初、この [世界] は自身 [のみ] であった。彼は「[私は] 創出しよう」と考えた。彼(自身、アートマン)は、企図によってこれら諸世界のものを創出した、と多くの讃頌を持つ者たち (bahvṛcāḥ, アイタレーヤ派) は [述べた]。[第3詩節] 他ならぬこのアートマンたるブラフマンから、虚空、風、火、水、大地 (urvī), 草、食物、身体

4.10-13 において、主宰神が、その幻力によって創出した世界の構成要素である諸元素（mahābhūta）から成る諸身体の中に自ら入り込んで諸個我となり、幻力の困惑させる能力（mohaśakti）によって迷い、輪廻転生世界に束縛される、と主張する¹⁰。ここで個我は、基盤（adhiṣṭhāna）である

というこれら全てのものが、順に生じた。[第4詩節] 他ならぬ私は多くなろう、[多く] 生まれたい、というこの願望から、[彼は] 苦行を行ってから、全世界を創出した、とティッティリ（タイッティリーヤ派の祖）は述べた。[第5詩節] 太初において、これは有のみであった。それは、多くなろうと考えた。また [それは] 火・水・食物・卵生のもの等を創出した、とサーマ [・ヴェーダ] 派の者たちは [述べた]。[第6詩節] 火から諸の火花が生じるように、不滅者から精神と物質という多様な諸存在が [生じる]、とアタルヴァ [・ヴェーダ] に属する天啓聖典は [述べる]。[第7詩節] 世界は、以前は未発現なものであった [が、] 名称と形態という見られるものによって、今や発現した。ヴィラージュ等において、それら（名称と形態）は明瞭となった。[第8詩節] ヴィラージュ、マヌ、人々、諸の牛、また諸のロバ、諸の馬、諸の羊、諸の山羊と、蟻に至るまでの一対のものを [彼は創出した] とヴァーージャサネーヤ派の者たちは [述べた] [第9詩節]。また、世界の生起の次第は PD の随所に説かれるが、例えば PD 第一章「個別の真実の識別章」（Pratyaktattvavivekaprakaraṇa）においては、第15詩節から第29詩節に渡り、原質（prakṛti）から五重化されていない五元素（五微細元素）が、またそれらから五重化された五元素（五粗大元素）が展開すること、また原質の幻力の側面にある精神性の原像（bimba）が主宰神に、一方原質の無明の側面にある精神性の映像（pratibimba, 顕現 ābhāsa, 写像 chāyā）が個我になり、それぞれ五微細元素に制約されることで主宰神はヒラニヤガルバ神（Hiraṇyagarbha）となり、ブラージュニヤ（prājña）であった個我はタイジャサ（taijasa）となり、さらにそれらがそれぞれ五粗大元素に制約されるとヒラニヤガルバ神はヴァイシュヴァーナラ神（Vaiśvānara = ヴィラージュ Virāj）となり、タイジャサはヴィシュヴァ（viśva）となることが述べられている。

¹⁰ PD 4.10-13: kṛtvā rūpāntaram jaivam dehe prāviṣad īśvaraḥ / iti tāḥ śrutayaḥ prāhur jīvatvaṁ prāṇadhāraṇāt // 10 // caitanyaṁ yad adhiṣṭhānaṁ liṅgadehaś ca yaḥ punaḥ / cicchāyā liṅgadehasthā tatsaṁgho jīva ucyate // 11 // māheśvarī tu māyā yā tasyā nirmāṇaśaktivat / vidyate mohaśaktiś ca taṁ jīvaṁ mohayaty asau // 12 // mohād anīśatāṁ prāpya magno vapuṣi śocati / īśaśṛṣṭam idaṁ dvaitaṁ sarvaṁ uktaṁ samāsataḥ // 13 // （主宰神は、個我に属する別の姿となってから、身体に入った、と以上の諸の天啓聖典は述べた。氣息の保持者であるので個我性がある。[第10詩節] 基盤である精神性と、またさらに微細身、[また] 微細身にある心の写像（chāyā）、それらの集合が個我であると言われる。[第11詩節] 一方、偉大な主宰神の幻力には、創造の能力 [があるのと] 同様に、また困惑させる能力もある。これ（困惑させる能力）は、その個我を迷わせる。[第12詩節] [個我は] 困惑の故に無力であることを得てから、身体に沈んで悲嘆する。主宰者によって

精神性 (caitanya) すなわちブラフマンと、諸微細元素 (*sūkṣmabhūta)¹¹ からなる微細身 (līṅgadeha)¹²、またその微細身にある心の写像 (chāyā) の集合であると述べられている¹³。精神性であるブラフマンは創出されたものではあり得ないが、微細身は主宰神による創出物であるため、それらの集合したものである個我も、主宰神による創出物が存在しなければ存在し得ないという意味において、主宰神によって創出されたものと言うことができるであろう。そのためヴィディヤーラニヤは、PD 4.13 において個我も含めて主宰神による創出物と述べていると考えられる¹⁴。

そして PD 4.14-17 において、ヴィディヤーラニヤは個我による創出について論じ始めるが、彼は個我による創出の典拠として「七つの食物を説くブラーフマナ」(saptānnabrāhmaṇa)、すなわち *Bṛhadāraṇyakopaniṣad* (BAU) 1.5.1-3 を想定している¹⁵。七つの食物とは、BAU 1.5.3 に見られ

創出された、二からなるこの一切が、簡潔に述べられた [第 13 詩節])。

¹¹ 本稿において、サンスクリット語の原語に付されている“*”は、原典にそのままの表記では見られず、執筆者が便宜上そのように表記しているということを現している。

¹² PD 1.18-23 において、虚空・風・火・水・地という諸元素 (bhūta) が生じ、それらから 17 器官からなる微細な身体 (*sūkṣmaśarīra) が生じることが述べられている。Dhole [1899: 5-6], Shastri [1954: 7-9], Swāhānanda [1967: 11-13] 参照。

¹³ fn. 10 の PD 4.11 を参照。

¹⁴ fn. 10 の PD 4.13 を参照。

¹⁵ PD 4.14-17: saptānnabrāhmaṇe dvaitam jīvaśṣṭam prapañcitam / annāni sapta jñānena karmañajanayat pitā // 14 // martyānnaṁ ekaṁ devānne dve paśvannaṁ caturthakam / anyat tritayam ātmārtham annānām viniyojanam // 15 // brīhyādikaṁ darśapūrṇamāsau kṣīraṁ tathā manah / vāk prāṇāś ceti saptatvam annānām avagamyatām // 16 // īśena yady apy etāni nirmitāni svarūpataḥ / tathāpi jñānakarmabhyām jīvo 'kārṣīt tadannatām // 17 // (七つの食物 [を説く]ブラーフマナにおいて、個我によって創出された二元が詳説された。父は、知によって、[苦行という]行為によって、七つの食物を生み出した。[第 14 詩節] 一つは生類 [一般] の食物、二つは神々の食物、第四のものは家畜たちの食物であり、三つから成る他の [食物] は自身のためのものである。[以上、七つの] 食物の分配が [述べられた]。[第 15 詩節] 諸の食物は、米等からなるもの、新月 [祭] と満月祭、牛乳、また思考器官、言葉、そして氣息、という七つであるとして理解されるべきである。[第 16 詩節] もしも、これら (七つの食物) は、本質上、主宰者によって創造されたものであるとしても、個我が、知と行為によって、それらが食物であることにした [第 17 詩節])。この PD 4.14-17 が BAU 1.5.1-3 に依拠していることに関しては、以下の PDi を

る米等、新月祭、満月祭、牛乳、思考器官、言葉、そして氣息であり、ヴィディヤーラニヤは、これらは主宰神によって創出されたものではあるけれども、個我が同じそれら七つのものを食物（anna）、すなわち個我自身にとっての享受対象性（bhogyatva）という形相（ākāra、あり方）として創出した、と述べる¹⁶。個我による享受対象性という形相の創出ということが、個我による創出のことである。

しかし、主宰神によって創出されたものが個我によって創出されたものでもあるとは、一体どういうことであろうか。ヴィディヤーラニヤは続いて、主宰神による創出と個我による創出の関係について以下のように述べる。

参照。PDī 111,3-5 (on PD 4.14): katham tatra prapañcitam ity āśaṅkya, saptānna-śabdavācyadvaitasṛṣṭipratipādakam “yat saptānnāni medhayā tapasājanayat pitā” (BAU 1.5.1) iti vākyaṁ arthataḥ saṁgrhṇāti — **annānīti** (【問】そこ（七つの食物を説くブラーフマナ）において、どのように詳説されたのか、という[問いを]想定して、【答】七つの食物という語によって表示される二元の創出を教示する、「父が、智慧によって、苦行によって、七つの食物を生み出した時」という文を、文脈上取り上げる。諸の食物を、と。), PDī 111,20-22 (on PD 4.16): tāni ca saptānnāni “ekam asya sādharmaṇam iti / idam evāśya tatsādharmaṇam annaṁ yad idam adyate” (BAU 1.5.2) ityādinā “āyam ātmā / vānmayo manomayaḥ prāṇamayah” (BAU 1.5.3) ityantena vākyaśaṁdarbheṣadūnakaṇḍikādvayarūpeṇa darsitānīty āha — **brihyādikam** iti (また、それらの七つの食物が、「その一つは[全てのものに]共通している、という、その、他ならぬこの、それらに共通している食物、これが食べられる」から「このアートマンは、言葉から成るものであり、思考器官から成るものであり、氣息から成るものである」に至る、ほんの少し短い二つの節をあり方とする文の集まりによって示された、ということを述べる。米等からなる、と)。

¹⁶ ここでは「食物」を「享受対象性という形相」として理解したが、それは以下の PDī に基づく。PDī 111,27f. (on PD 4.17): nanūktasaptānnānām jagadantaḥpātītvenēśvaranirmitatvāj jīvanirmitatvābhidhānam ayuktam ity āśaṅkya, tatsvarūpasyeśvaranirmitatve 'pi bhogyatvākārasya jīvanirmitatvān maivam ity āha (【反論】上述の七つの食物は、世界に含まれるものとして主宰神によって創造されたものであるので、個我によって創造されたという表述は理に適っていない、という[反論を]想定して、【答】それら（七つの食物）の本質は主宰神によって創造されたものであったとしても、享受対象性という形相は個我によって創造されたものであるので、決してそのようではない、と答える)。

PD 4.18-23:

īśakāryaṃ jīvabhogyāṃ jagad dvābhyāṃ samanvitam /

pitṛjanyā bhartṛbhogyā yathā yoṣit tatheṣyatām // 18 //

māyāvṛtṭyātmako hīśasaṃkalpaḥ sādhanam janau /

manovṛtṭyātmako jīvasaṃkalpo bhogasāadhanam // 19 //

īśanirmitamaṇyādaḥ vastunye ekavidhe sthite /

bhoktṛdhīvṛttinānātvāt tadbhogo bahudheṣyate // 20 //

hr̥ṣyaty eko maṇim labdhvā krudhyaty anyo hy alābhataḥ /

paśyaty eva virakto 'tra na hr̥ṣyati na kupyati // 21 //

priyo 'priya upekṣyaś cety ākārā maṇigās trayah /

sṛṣṭā jīvair īśasṛṣṭaṃ rūpaṃ sādhanāṇaṃ triṣu // 22 //

bhāryā snuṣā nanāndā ca yātā mātety anekadhā /

pratiyogidhiyā yoṣid bhidyate na svarūpataḥ // 23 //

主宰神によって作られ、個我によって享受される世界は、二つのものと結びついている。女性が、父から生まれたものであり、夫によって享受されるものであるように、[世界も] そのように認められるべきである。[第 18 詩節]

実に、幻力の活動 (vṛtti, 変容) を本性とする主宰者 (īśa = 主宰神) の企図 (saṃkalpa) が、[世界の] 生起 (jani) に対する実現手段 (sādhana) である。思考器官 (manas) の活動を本性とする個我の企図が、[世界の] 享受 (bhoga) の実現手段である。[第 19 詩節]

主宰神によって創造された (nirmita) 宝珠等という実在物 (vastu) が一様であると定まっている場合、享受主体 (bhoktṛ) の統覚 (dhī) の活動は [享受主体毎に異なるので] 多数であるのでそれ (実在物) の享受は多様であると認められる。[第 20 詩節]

実に、ある者は、宝珠を得て喜び、他の者は [宝珠を] 得ないので怒る。それ (宝珠) に無関心なものは見るのみで、喜びもしないし怒りもしない。[第 21 詩節]

宝珠にある、好ましい、好ましくない、無視される、という三つの形相は、諸個我によって創出された。三つに共通している姿形 (rūpa) は、主宰者によって創出された。[第 22 詩節]

[一人の] 女性が、関連項 (pratiyogin) を意識することで、妻、息子

の妻（嫁）、夫の姉妹、夫の兄弟の妻、母、と多様に区別されるのであり、本質上「区別されるのでは」ない。[第 23 詩節]

このうちの PD 4.18-22 の記述を整理すると以下のようになろう。女性が、父から生まれたもの¹⁷であり、夫によって享受されるものであるように、様々な実在物からなる世界も、主宰神によって作られたものであり、個我によって享受されるものであるというように、「作られたもの」と「享受されるもの」という二つの側面と結びついている。この二つの側面のうち、世界が主宰神によって作られているということは、そのまま世界が主宰神による創出物であるということに対応している。一方、世界が個我によって享受されるものであるということは、そのままでは世界が個我による創出物であるということに対応していないように思える。しかし先に述べたように、個我による創出とは、個我による享受対象性という形相の創出のことである。そのため世界が個我による創出物であるということは、享受対象性という形相としての世界が個我による創出物である、ということの意味している。

また、主宰神によって作られた、すなわち主宰神によって創出された世界の実例として「女性」や「宝珠」が挙げられている。この主宰神による創出物は、主宰神の企図¹⁸によって創出されるものであり、具体的にはその主宰神の企図に応じて根本物質たる幻力の活動の結果、幻力が変容したものである。さらに、この主宰神による創出物は、ある女性ならその女性、またある宝珠ならその宝珠としてその姿形は一つである。一方この主宰神による創出物に対して、個我によって享受される形相としての世界、すなわち個我によって創出された世界の実例としては、夫や夫の両親等によって享受されるものとしての女性の形相、すなわち「妻」や「嫁」等

¹⁷ もちろん、物理的に女性は父から生まれるものではない。父と母から生まれる、と言った方が正確であろう。しかしここでは、女性と、男性である父と夫が対比されているためにこのような表現が採られているのである。

¹⁸ この PD 第四章における個我による創出説に影響を受けていると考えられる、16 世紀から 17 世紀頃に活動したアドヴァイタ学派の思想家マドゥスーダナ・サラスヴァティー（Madhusūdana Sarasvatī）の著作 *Bhaktirasāyaṇatīkā* における議論においては、この「企図」（saṃkalpa）は「構想」（vikalpa）とほぼ同義で使用されている。眞鍋 [2025: fn. 39, 40] 参照。

という諸形相や、宝珠の「好・悪・無関心」という三つの形相が挙げられている。この個我による創出物は、個我の企図によって創出されるものであり、具体的には個我の企図に応じたその個我の内的器官（思考器官、統覚、統覚器官 *buddhi*）¹⁹の活動の結果、内的器官が変容したものである。そして、主宰神による創出物の姿形が一つであるのに対して、享受主体たる個我の内的器官の活動は多様であるので、例えば 1 人の女性に対して妻や嫁等という諸形相が生じ、また一つの宝珠に対して好・悪・無関心という三つの形相が生じるように、個我による創出物たる享受される形相は多様である。さらに、個我の内的器官の活動が多様であるのは、主宰神による創出物である対象とその対象を享受する個我の、例えば女性とその夫や夫の両親等といった関連項、つまり関係性によって、個我毎にその対象に対する内的器官の活動が異なるからであるというのである。

主宰神による創出物と個我による創出物に関する以上の記述によると、ヴィディヤーラニヤは、主宰神による創出を外界の世界の創出であり、個我による創出を、その外界の世界を対象とする内的器官における享受対象の形相の創出と考えていたということが言えよう。このことは、以下の PD 4.31 によって明示されている。

PD 4.31:

saty evaṃ viṣayau dvau sto ghaṭau mṛnmayadhīmayau /
mṛnmayo mānameyaḥ syāt sākṣibhāsyas tu dhīmayah // 31 //

以上のようにあれば、土から成る壺と統覚から成る壺という二つの対象がある。土から成る〔壺〕は〔認識〕手段によって〔認識〕対象とされるものに違いなく、一方、統覚から成る〔壺〕は目撃者 (*sākṣin*) によって照らされる（認識される）ものに違いない。

¹⁹ PD を含むアドヴァイタ学派の教学において、思考器官と統覚器官はそれぞれ内的器官の一機能のことである。PD 4.20: *tair antaḥkaraṇaṃ sarvair vṛttibhedena tad dvidhā / mano vimarśarūpaṃ syād buddhiḥ syān niścayātmikā //*（それら（五つの知覚器官）すべてから内的器官が〔生じる〕。機能の違いによって、それ（内的器官）は二様である。思考器官は熟慮をあり方とするであろう。統覚は、決定を本性とするものでであろう）。内的器官、思考器官、統覚器官（統覚）、さらに心 (*citta*) はアドヴァイタ学派の用語としてはほぼ同義で使用されるので、本稿では和訳と特に限定しなければならない場合を除いて、一括して内的器官という用語を使用する。

ここでは、「土から成る壺」が主宰神による創出物のことであり、「統覚から成る壺」が内的器官（＝統覚）の変容たる個我による創出物のことである。ここでは、主宰神による創出物である土から成る壺が認識手段によって認識対象とされるものであると述べられているが、認識手段が土から成る壺を認識するということこそが、個我による創出のことである。というのも、アドヴァイタ学派の認識論においては、認識手段は内的器官の活動であり²⁰、また認識手段が土から成る壺を認識するということは、土から成る壺を認識対象（＝享受対象）として認識手段に壺の形相が生じるということ²¹であり、そのことはすなわち、土から成る壺を認識対象として内的器官が壺の形相を取る、ということに他ならないからである。またそのことを「壺」の側から表現すると、その壺は内的器官の変容物である、

²⁰ PD 4.30 として引用されているスレーシュヴァラ（Sureśvara, 9 世紀頃）の *Bṛhadāraṇyakopaniṣadbhāṣyavārttika* (BAUBhV) 1.2.103 とそれに対する以下の PDi を参照。PD 4.30 = BAUBhV 1.2.103: *mātur mānābhiniṣpattir niṣpannam meyam eti tat / meyābhisamgatam tac ca meyābhatvaṁ prapadyate //*（認識主体から「認識」手段が出現し、生じたそれ（認識手段）は認識対象に達する。またそれ（認識手段）は、認識対象と結びつき、認識対象の顕現を持つものとなる）、PDi 115,4-7: *mātur iti. mātuḥ sādhiṣṭhānabuddhisthacidābhāsarūpāt pramātur mānābhiniṣpattir mānasya sābhāsāntaḥkaraṇavṛttirūpasyābhiniṣpattir utpattir bhavatīti śeṣaḥ. niṣpannam utpannam tan mānam meyam ghaṭādirūpam eti prāpnoti. kiṁ ca tan mānam meyābhisamgatam prameyeṇa sambaddham san meyābhatvaṁ meyasābhevābhā yasya tan meyābham tasya bhāvas tattvaṁ meyasamānakāratām prapadyate prāpnotīty arthaḥ*（認識主体から「以下を註釈する」。認識主体から、すなわち基盤を持つ統覚にある心の顕現をあり方とする認識主体から、「認識」手段の出現、すなわち顕現を持つ内的器官の活動をあり方とする「認識」手段の出現、すなわち生起がある、と補われる。生じた、すなわち生起したその「認識」手段は、壺等をあり方とする認識対象に達する、すなわち至る。さらに、その「認識」手段は、認識対象と結びつき、すなわち認識対象と結合して、認識対象の顕現を持つこと、すなわち認識対象の顕現と似た顕現を持つもの、それが認識対象の顕現を持つものであり、それ（認識対象の顕現を持つもの）の状態がそれであること（認識対象の顕現を持つこと）であり、「またそれが」認識対象と同じ形相を持つものの性であり、「そのような状態」になる、すなわち至る、という意味である）。

²¹ fn. 20 と以下の PD 4.27ab を参照。PD 4.27ab: *bāḍham māne tu meyena yogāt syād viṣayākṛtiḥ* /（確かに。しかし、「認識」手段において、対象の形（*viṣayākṛti*）が認識対象との結合に基づいて有るであろう）。

ということである。そして、以上のように個我によって創出された統覚から成る壺は、個我の構成要素の一つであり最終的な認識主体である精神性たる目撃者の認識対象となり、外界の土から成る壺についての認識が完結するのである。

以上のように、ヴィディヤーラニヤは、主宰神による創出を外界の世界の創出であると考えており、また個我による創出を、その外界の世界を対象とした内的器官における享受対象の形相の創出と考えていた、ということが確認される。したがって、主宰神によって創出されたものが個我によって創出されたものでもある、ということは、主宰神によって創出されたものと全く同一のものが個我によっても創出されるというわけではなく、主宰神によって創出された外界のものを享受対象とすることで、内的器官にその対象の形相が創出されるということである。つまり、主宰神によって創出されたものの形相が個我によっても内的器官に創出されるという意味で、主宰神によって創出されたものが個我によっても創出されると言われるのである。

なお、PD 4.31 は対象認識の議論であるが、PD 4.21-22 では宝珠に対する好・悪・無関心という感情の議論もなされていた。このように、個我による創出物である享受対象の形相に関して、対象「認識」としての形相と、その対象認識の結果として生じる「感情」としての形相の双方が意図されている²²。

1.2 個我によって創出された世界が輪廻転生世界への束縛の原因である

以上のような主宰神によって創出された世界と個我によって創出された世界のうち、ヴィディヤーラニヤは、個我によって創出された世界こそが個我を輪廻転生世界へ束縛する原因である、と述べる。それは、各個我に楽・苦が生じるのは個我によって創出された世界の有無によるのであって、主宰神によって創出された世界の有無とは無関係だからである。このことが説かれている PD 4.32-35 を以下で確認したい。

²² この点については眞鍋 [2025: 12] を参照。

PD 4.32-35:

anvayavyatirekābhyāṃ dhīmayo jīvabandhakṛt /
 saty asmin sukhaduḥkhe stas tasminn asati na dvayam // 32 //
 asaty api ca bāhyārthe svapnādaḥ badhyate naraḥ /
 samādhisuptimūrchāsu saty apy asmin na badhyate // 33 //
 dūradeśaṃ gate putre jīvaty evātra tatpitā /
 vipralambhakavākyena mṛtaṃ matvā praroditi // 34 //
 mṛte 'pi tasmin vārttāyāṃ aśrutāyāṃ na roditi /
 ataḥ sarvasya jīvasya bandhakṛn mānaśaṃ jagat // 35 //

肯定的随伴（anvaya）と否定的随伴（vyatireka）によって、統覚から成るものが個我の束縛を為す。それ（統覚から成るもの）が存在している時、楽と苦とがあり、それ（統覚から成るもの）が存在していない時、二つのもの（楽と苦）はない。[第 32 詩節]

また人は、夢等において外界の事物が「現に享受対象として」存在していない時でも束縛されており、「精神」集中（samādhi）や熟睡状態（supti）や昏睡状態（mūrchā）においてそれ（外界の事物）が「現に外界に」存在しているとしても束縛されていない。[第 33 詩節]

遠い場所へ行った息子が必ず生きている時、ここに「いる」彼の父は、詐欺師の発言によって、「息子を」死んだと考えて悲嘆する。[第 34 詩節]

彼が死んだとしても、報せが聞かれない時、「彼の父は」嘆かない。したがって、全ての個我にとって、思考器官による世界が束縛を為す。[第 35 詩節]

「これがあるときにそれがあり、これがなければそれもない」という因果関係を確定する肯定的随伴と否定的随伴によって、統覚から成るもの、すなわち個我によって創出された世界がある時には楽・苦という束縛があるが、その個我によって創出された世界がない時には楽・苦もない。一方、夢等においては、外界の事物、すなわち主宰神によって創出された世界が、外界には存在するが享受対象としては現に存在していなくとも、内的器官に蓄えられている潜在印象が発現した内的器官から成る対象を見ているので、その対象に対する楽・苦という束縛が存在する。また、精神

集中や熟睡状態、昏睡状態においては、主宰神によって創出された世界が外界に現に存在していても、内的器官から成る個我によって創出された世界が対象として見られていないの²³で、楽や苦という束縛がない。したがって、楽・苦の有無の原因となるのは主宰神によって創出された外界の世界の有無ではなく、個我によって創出された世界の有無なのである。

以上の議論の実例として、父親と遠方にいる息子が提示されている。ある父子に関して、遠方に行った息子が実際に生きているか死んでいるか、すなわち外在的に存在しているか存在していないかにかかわらず、彼の父親に「息子は生きている」という認識があるか、あるいは「息子は死んだ」という認識があるかによって、この父親に悲嘆、つまり苦の有無があるというのである。主宰神によって創出された外在する息子に対して、父の持つこの「息子は生きている」あるいは「息子は死んだ」という認識が、個我によって創出された享受対象としての形相である。そして以上のことから、全ての個我にとっての束縛の原因は、思考器官による世界、すなわち個我によって創出された世界なのである。

2. 主宰神によって創出された世界の有無に関する議論

ところで、個我によって創出されたものは、主宰神によって創出されたものを対象として内的器官に生じるその対象の形相であった。ということは、各享受主体（個我）は、主宰神によって創出された外界の世界を間接的に享受するのみであって、直接的には享受し得ないということである。また先に確認したように、個我によって創出されたものが束縛の原因である。以上のようなのであれば、外界の事物にはどのような意義があるのだろうか。外界の事物を想定することは無意義なのではないのだろうか。そのため、アドヴァイタ学説が認識論 (vijñānavāda)、すなわち仏教の唯識説となってしまう恐れがある。ヴィディヤーラニヤもこの点に関して自覚的であったようで、以上のようなアドヴァイタ学説が唯識説となってしまうという反論を想定し²⁴、この反論に対して以下のように答えている。

²³ シャンカラ (Śaṅkara, 8 世紀頃) 以来のアドヴァイタ教学における、個我の各意識状態の認識対象に関しては中村 [1989: 558-565] を参照。

²⁴ PD 4.36ab: vijñānavādo bāhyārthavaiyarthyaṭ syād iheti cet / (【反論】この[世界]において、外界の事物が無意義であるので、認識論となってしまう、というすれば)。

PD 4.36cd-37:

na hr̥dy ākāram ādhātum bāhyasyāpekṣitatvataḥ // 36cd //

vaiyarthyaṃ astu vā bāhyaṃ na vārayitum īśmahe /

prayojanam apekṣante na mānānīti hi sthitiḥ // 37 //

【答】そうではない。心に形相を引き起こすために、外界〔の事物〕が必要とされるから。

あるいは、〔外界の事物は〕無意義なものに違いない。〔しかし〕外界の事物を〔我々は〕阻害することもできない。というのも、諸の〔認識〕手段は意義（prayojana）に依拠しない、ということが定まっているから。

PDī の記述も参照すると、ここでヴィディヤーラニヤは以下のように返答していることとなる。もしも、内的器官から成る世界が束縛の原因であるとしても、内的器官に形相を引き起こすため、すなわちその内的器官から成る世界の生起の契機として、外界の事物の存在が必要とされる、すなわち認められる。したがって、外界の事物は無意義ではなく、唯識説となってしまうことはない、というのである²⁵。または、外界の事物が無意義であるという反論者の反論を大胆にも認めたとしても²⁶、唯識説とは異なり、アドヴァイタ学派は外界の事物の存在を阻害することもできない。それ故、唯識説となることはない、というのである²⁷。

²⁵ PDī 116,26-27: yady api mānasaprapaṇcasyaiva bandhaḥhetutvaṃ tathāpi taddhetutvena **bāhyārthasyāpi svikārān na vijñānavādaprasaṅga iti bhāvaḥ** (【答】もしも、他ならぬ思考器官からなる現象世界が束縛の原因であるとしても、それ(思考器官からなる現象世界)の原因として外界の事物も認められるので、認識論が帰結してしまうことはない、ということである)。

²⁶ PDī 116,29-33: nanu na hr̥dy ākārasamarpaṇāya bāhyapadārtho 'pekṣaṇīyaḥ, pūrvapūrvamānasaprapaṇcasamśkārasyaivottarottaramānasaprapaṇcahetutvopapatter ity āśaṅkya prauḍhāvādena tad āngīkaroti — **vaiyarthyaṃ** iti (【反論】心に形相をもたらすために、外界の事物が必要とされるべきであることはない。それぞれ以前の思考器官による現象世界の潜在印象こそが、それぞれ後の思考器官による現象世界の原因であることが可能であるから、という〔反論を〕想定して、【答】大胆な論によってそのことを認める。無意義なものと)。

²⁷ PDī 116,33-34: tarhi vijñānavādāt ko bheda ity ata āha — **bāhyam** iti. vijñānavādinō bāhyārtham evāpalapanti. vyaṃ na tathety ayam eva bheda ity arthaḥ (【反論】そうだとすると、

続く PD 4.37cd において、どうしてそのようなことが言えるのかという理由が述べられているが、この「諸の認識手段は意義に依拠しない、ということが定まっている」という理由に関しては説明が必要であろう。ここではまず、現に認識手段が発動しているということが議論の前提とされていると考えられる。そしてその認識手段とは、ヴィディヤーラニヤ曰く、外界の事物を対象とする内的器官の活動のことであった。そのため認識手段が発動しているということは、外界の事物を対象として、内的器官にその対象の形相が生じているということである。以上のことを踏まえて「諸の認識手段は意義に依拠しない、ということが定まっている」という理由がどのようなことを述べているのかを考察すると、以下のようになりそう。すなわち、認識手段は、意義のある対象のみに対して発動し、意義のない対象に対しては発動しない、ということはない。また、その認識手段の対象である外界の事物も、認識手段によって認識されて成立している以上、意義を欠いているからといって存在しないことにはならないのである²⁸。それ故、外界の事物の存在を我々は阻害することもできないのである。

以上のように、ヴィディヤーラニヤは、外界の世界を、束縛の原因である内的器官から成る世界を引き起こすものとして無意義なものではないと考えている。また彼は、たとえ外界の世界が無意義であったとしても、認識手段はその対象が無意義であるか否かに関係なく発動するものであり、かつ認識手段が発動した結果として内的器官から成る世界が現に存在しているので、その認識手段の対象である外界の世界の存在は否定され得ないとも考えている。以上のことから、ヴィディヤーラニヤは、外界の世界が無意義であるかどうかに関わりなく、個我によって創出された内的器官から成る世界が成立するためには、その原因として外界の世界

認識論（唯識説）と何が違うのか、という[反論があるので]、【答】それ故に答える。外界[の事物]をと。認識論者（唯識論者）たちは、他ならぬ外界の事物を否定する。我々はそうようではない、という以上のことこそが違いである、という意味である）。

²⁸ 以下の PDi も参照。PDi 117,1-2: mānādhīnā vastusiddhir na prayojanādhīnā, mānasiddhasya prayojanaśūnyatvamātreṇāsattvasya laukikair vādibhir vānabhyupagamād iti bhāvaḥ（[認識]手段に依存する実在の成立は、意義に依存するものではない。[認識]手段によって成立したものが、単に意義を欠いているので存在していないことは、世間の者たちにも、論者たちによっても、容認されないから、ということである）。

の存在を認めなければならない、と考えていたということが理解される。この外界の世界の存在を認めなければならないという点が、外的な世界に対して内的な認識上の世界と言い得るもの²⁹を共通して主張しながらも、唯識学派とアドヴァイタ学派が見解を異にする点である。

またヴィディヤーラニヤは、ブラフマンの知の獲得のためには、主宰神によって創出された外界の二元世界が止滅する必要があるのかないのか、という問題も論じている³⁰。ヴィディヤーラニヤは、ブラフマンの知を獲得するためには、実際に外界の二元世界が止滅しているかどうかは関係ないと主張する。

PD 4.40-42:

anivṛtte 'pīśasṛṣṭe dvaite tasya mṛṣātmātām /

buddhvā brahmādvayaṃ boddhum śakyam vastvaikyavādinah // 40 //

pralaye tannivṛtau tu guruśāstrādyabhāvataḥ /

virodhidvaitābhāve 'pi na śakyam boddhum advayam // 41 //

abādhakaṃ sādhaṃ ca dvaitam īśvaranirmitam /

apanetum aśakyam cety āstāṃ tad dviṣyate kutaḥ // 42 //

主宰者によって創出された二元が止滅していなくても、実在が唯一であることを主張する者にとって、それ（主宰者によって創出された二元）が虚偽を本性としていることを理解してから、不二であるブラフマンが理解され得る。

一方、帰滅時に（pralaye）それ（外界の二元）が止滅している場合、師や教示書等が存在しないので、[不二と] 矛盾している [外界の] 二元が存在しなくとも、不二は理解され得ない。

主宰神によって創造された二元は、[不二の知の] 排撃要因ではなく（abādhaka）、また [不二の知の] 実現手段であり、また否定され得

²⁹ アドヴァイタ学派にとっては、内的器官は物質的な存在であるので、その内的器官の活動から成る享受対象としての形相は厳密に言えば認識上のものではない。

³⁰ PDī では、以下のような反論を想定している。PDī 117,22: nanu bāhyadvaitanivāraṇam antareṇādvitīyabrahmajñānam eva nodīyād ity āśaṅkya ... (【反論】外界の二元の排除なくしては、第二のものを持たないブラフマンの知自体が生じないはずである、という [反論を] 想定して……)。

ないので、それは全く存在する (āstām)。何故、[それが] 嫌悪されるのか。

まず、実在が唯一であることを主張する者、つまりアドヴァイタ学派の者にとって、主宰神によって創出された外界の二元世界が止滅していなくても、その外界の二元世界が虚偽であることを理解することで、不二であるブラフマンが理解され得る。したがって、ブラフマンの知の獲得には実際に外界の二元世界が止滅する必要はないというのである。

また、外界の二元世界の帰滅時には、その二元世界は原因である幻力 (māyā) に接收されて止滅しているが、その時には不二であるブラフマンという真実を教示し、その獲得の実現手段となる師や教示書等も存在しないので、その不二という真実は理解されない。したがって、たとえ外界の二元世界が止滅していたとしても、必ずしもブラフマンの知が獲得されるわけではないため、ブラフマンの知の獲得のためには実際に外界の二元世界が止滅する必要はないのである³¹。

以上のように、外界の二元世界が止滅していなくとも不二であるブラフマンの知が獲得され得るので、外界の二元世界はそのブラフマンの知を排撃するものではない³²。また、師や教示書等といった外界の二元世界はブラフマンの知を獲得するための実現手段である³³。さらに、虚空等と

³¹ 以下の PDī も参照。PDī 117,32-118,3: **pralaye pralayāvasthāyām tannivṛttau tu** tasya dvaitasya nivṛttau satyām tu **virodhidvaitābhāve** 'py advaitajñānavirodhitvena bhavadabhimatasya dvaitasya nivāraṇe saty api **guruśāstrādyabhāvato** guruśāstrādirūpasya jñānasādhana-syābhāvād dhetor **advayaṃ vastu bodddhuṃ śakyam na bhavati**. atas tannivāraṇam apra-yojakam iti bhāvaḥ (帰滅時に [以下を註釈する]。一方、帰滅時に、すなわち帰滅の状態において、それが止滅している場合、すなわちその二元が止滅している時に、矛盾している二元が存在しなくとも、すなわち不二の知と矛盾しているので、貴方に承認されている二元が排除されていたとしても、師や教示書等が存在しないので、すなわち師や教示書等をあり方とする知の実現手段が存在しないので、不二である実在は理解され得ない。したがって、それ(二元)の排除は[不二の知を]引き起こすものではない、ということである)。

³² PDī 118,9: **īśvaranirmitaṃ dvaitam abādhakam**, tanmṛṣātvajñānenaivādvaitajñānotpatter uktatvāt (主宰神によって創造された二元は、排撃要因ではない。それ(二元)が虚偽であることを知ることのみによって、不二の知が生じることが述べられているから)。

³³ PDī 118,9-10: **sādhakam ca**. guruśāstrādirūpasya tasya jñānasādhanatvāt (また、実現手

いう外界の二元世界³⁴は、PD 4.37 で論じられていたように、認識されている以上我々によっては否定され得ない。以上のことから、外界の二元世界は必ず存在する³⁵のであって、その存在を嫌悪する、つまりは否定する必要はないというのである。もちろん、ここで主宰神によって創出された外界の世界が存在する、といっても、同時にそれが虚偽であることも述べられているので、究極的にはその存在性は否定されるものであることは言うまでもない。

以上のように、ブラフマンの知の獲得に関する議論において、ヴィディヤーラニヤは、主宰神によって創出された外界の世界を、虚偽であるものとしつつも、ブラフマンの知を排撃するものではなく、その実現手段であると、その存在を肯定的に捉えていることが理解される。そしてこの外界の世界は、内的器官から成る世界を成立させる基盤であり、また我々によっては否定され得ないものであるため、内的器官から成る世界が止滅したとしても存続するものであると考えられる。ということはすなわち、ある個我が生前に解脱したとしても、別の個我にとってあり続けるのはもちろんのこと、その解脱した個我が身体を捨てるまでは、その個我にとっても外的な環境世界としてあり続けるということである。このように、主宰神によって創出された世界は、享受主体によって直接的には享受され得ず、個我によって創出された形相を通じて間接的にのみ享受されるものであり、また究極的にはその存在が否定されるものである、という点では消極的な存在意義が与えられている。しかし、解脱のためにその止滅が望まれる、個我によって創出された世界と比較すると、主宰神によって創出された世界は、その存在意義が積極的に認められていると言うこともできる。

段である。師や教示書等をあり方とするそれ（二元）は、知の実現手段であるから）。

³⁴ PDī 118,10: ākāśādirūpadvaitam asmābhir **apanetum aśakyaṃ ca**（また、虚空等をあり方とする二元は、我々によって否定され得ない）。

³⁵ PDī 118,10-11: **iti hetos tad dvaitam āstām**（それ故、それ、すなわち二元は全く存在する）。

3. 個我によって創出された世界について

3.1 個我によって創出された世界の二分類

以上、PD 第四章における主宰神によって創出された外界の世界についての議論を確認した。続いて、ヴィディヤーラニヤが、個我にとっての束縛の原因となる、個我によって創出された世界をどのようなものと考えているのか、さらに詳しく見ていきたい。まず彼は、個我によって創出された世界を二つに分類する。

PD 4.43:

jīvadvaitaṃ tu śāstrīyaṃ aśāstrīyaṃ iti dvidhā /
upādādīta śāstrīyaṃ ā tattvasyāvbodhanāt // 43 //

一方、個我による二元〔世界〕は、教示書に由来するもの（śāstrīya）と教示書に由来しないもの（aśāstrīya）との二種である。教示書に由来する〔二元世界〕を、真実を理解するまで保持するべきである。

このようにヴィディヤーラニヤは、個我によって創出された二元世界を、教示書に由来するものと教示書に由来しないものとに二分する。さらに、個我によって創出された世界が束縛の原因であるというものの、前者の教示書に由来するものは、最高のブラフマンたる真実を理解するまでは保持すべきであると主張している。

では、この真実を理解するまで保持されるべき、教示書に由来する個我によって創出された世界とはどのようなものなのであろうか。ヴィディヤーラニヤは以下のように述べる。

PD 4.44:

ātmabrahmavicārākhyam śāstrīyam mānasam jagat /
buddhe tattve tac ca heyam iti śrutyanuśāsanam // 44 //

アートマンたるブラフマン³⁶に関する考察と呼ばれるものが、教示

³⁶ 以下の PDī を参考に、“ātmabrahma-” を同格限定複合語で理解した。PDī 118,26f. (on PD 4.44): ātmeti. pratyagrūpasya brahmaṇo vicārākhyam yac chravaṇādikaṃ tac chāstrīyam mānasam jagat ity arthaḥ (アートマン [以下を註釈する]。内的なものをあり方とする

書に由来する、思考器官による世界である。そして、真実が理解された時、それ（教示書に由来する世界）は捨てられるべきである、ということが天啓聖典（śruti）の教えである。

この PD 4.44 によると、教示書に由来する個我によって創出された世界とは、ブラフマンに関する考察であると述べられている。しかし、「考察」という行為そのものが個我によって創出された世界とは考えられないので、内的器官に生じた「考察」の形相（内的器官による考察の内容）が個我によって創出された世界であるということであろう。さらに PDī によると、ブラフマンに関する「聴聞等」（śravaṇādi）が教示書に由来する個我によって創出された世界である。したがってこの場合も、ブラフマンに関して、天啓聖典などの教示書を聞き（śravaṇa）、その内容を考え（manana）、瞑想する（nididhyāsana）際に内的器官に生じる形相（内的器官による聴聞・思考・瞑想の内容）が、教示書に由来する個我によって創出された世界である、ということであろう。そしてヴィディヤーラニヤは、アートマンがブラフマンであるという真実が理解された暁³⁷には、教示書に由来する個我によって創出された世界は、その存在意義である真実が既に理解されたために捨てられるべきである、ということを天啓聖典は教えている³⁸、と述べる。

ブラフマンに関する考察と呼ばれる聴聞等、それが教示書に由来する、思考器官による世界である、という意味である）。

³⁷ PDī 118,28 (PD 4.44): **tattve brahmātmaikyalakṣaṇe buddhe sākṣātkṛte satīty arthaḥ**（真実、すなわちブラフマンとアートマンが同一であることを特徴とすることが理解された時、すなわち直証が為されている時、という意味である）。

³⁸ ヴィディヤーラニヤは、PD 4.45-48 において具体的に諸ウパニシャッドを引用、または示唆している。PD 4.45-48: śāstrāṇy adhītya medhāvī abhyasya ca punaḥ punaḥ // paramam brahma vijñāya ulkāvat tāny athotsrjet // 45 // (= ANU 1) grantham abhyasya medhāvī jñānavijñānatatparaḥ / palālam iva dhānyārthī tyajed grantam aśeṣataḥ // 46 // (= ABU 18) tam eva dhīro vijñāya prajñam kurvīta brāhmaṇaḥ / nānudhyāyād bahūṇ chabdān vāco viglāpanam hi tat // 47 // (= BAU 4.4.21) tam evaikaṁ vijānītha hy anyā vāco vimuñcatha / (= MuU 2.2.5) yacched vān manasī prajñā ityādyāḥ śrutayaḥ sphuṭāḥ // 48 //（賢者は、諸の教示書を学習し、また何度も何度も「諸の教示書を」繰り返し「実践し」、また最高のブラフマンを認識して、「夜道を歩き終わる際に」松明を「捨てる」ように、それら（諸の教示書）を捨てるべきである。[第 45 詩節] 聖典知と実践知とそれ（ブラフマン）を目的とす

このように、教示書に由来する個我によって創出された世界とは、教示書の教えに基づいてブラフマンについて探求する際に内的器官に生じる諸形相であり、真実を知るための実践過程の心的状態を指すものと言うことができる。そして真実を知った暁には、そのような心的状態は必要がなくなるため、捨てられるものなのである。

では、もう一方の個我によって創出された世界である、教示書に由来しない世界とはどのようなものであろうか。ヴィディヤーラニヤは、教示書に由来しない個我によって創出された世界を以下のようにさらに二つに分類する。

PD 4.49:

aśāstrīyaṃ api dvaitaṃ tīvraṃ mandam iti dvidhā /

kāmakrodhādikaṃ tīvraṃ manorājyaṃ tathetarat // 49 //

教示書に由来しない二元〔世界〕も、激しいもの（*tīvra*）と穏やかなもの（*manda*）との二種である。激しいものは欲望や怒り等（*kāmakrodhādika*）であり、また他方（穏やかなもの）は想像（*manorājya*）である。

教示書に由来しない個我によって創出された二元世界は、激しいものと穏やかなものとに二分される。そして、激しいものとは「欲望や怒り等」といった内的器官の形相であり、穏やかなものとは「想像」という内的器官の形相である。PD においても PDī においても、特に穏やかな二元世界である「想像」が具体的にどのようなものであるか、これ以上詳しく述べられていない。しかし後に確認するように、この「想像」は、主宰神によ

る賢者は、文章を繰り返し〔実践し〕てから、穀物を求める者が粃殻を〔捨てる〕ように、文章を残りなく捨てるべきである。〔第 46 詩節〕賢明なブラーフマナは、他ならぬそれ（アートマン）を認識して、智慧を為すべきである。〔彼は〕多くの言葉を瞑想すべきではない。というのも、それは言葉を疲れさせるから。〔第 47 詩節〕同じそれを唯一のものと〔君たちは〕知れ。実に、他の諸の言葉を放棄せよ。賢明な知者は、言葉を抑制せよ、等という明瞭な天啓聖典がある〔第 48 詩節〕。特に ANU と ABU の両ウパニシャッドは、松明や粃殻は目的を達成した者には必要ないために捨て去られるように、教示書も捨て去られるべきであるという趣旨である。

って創出された外界の事物と全く対応しているというものではない³⁹が、しかし何らかの外界の事物を前提としているため、全くの「空想」といったものでもない⁴⁰。また、無相三昧によって除去されると述べられており、「想像」とは思考器官に生じる思考内容（思考の形相）一般を意図しているように思われる。また、これら教示書に由来しない二種の二元世界のうち、激しいものは感情としての個我による享受対象の形相、穏やかなものは対象認識としての享受対象の形相を意図していると考えられる。

では、これら教示書に由来しない個我によって創出された二種の世界は、どの時点で除去されるべきものなのであろうか。この点についてヴィディヤーラニヤは以下のように述べる。

PD 4.50-51:

ubhayaṃ tattvabodhāt prāṇ nivāryaṃ bodhasiddhaye /

śamaḥ samāhitatvaṃ ca sādhanēṣu śrutaṃ yataḥ // 50 //

bodhād ūrdhvaṃ ca tad dheyam jīvanmuktiprasiddhaye /

kāmādikleśabandhena yuktasya na hi muktatā // 51 //

〔教示書に由来しない二種の二元の〕両方が、真実を理解する前に、〔真実の〕理解の達成のために排除されるべきであるので、〔それ故に〕実現手段（sādhana）のうちで、静穏（śama）と〔精神を〕集中していること（samāhitatva）とが述べられた。

また、〔真実の〕理解より後に、それ（教示書に由来しない二種の二元）は生前解脱（jīvanmukti）の実現のために捨てられるべきである。

実に、欲望等の煩悩という束縛と結合した者は解脱していない。

まず、教示書に由来しない二種の二元世界の両方とも、真実を理解する前に、その真実の理解が成立するために排除されるべきものである、と述べられている。そしてそのことの根拠（証印, liṅga）は⁴¹、真実の理解に

³⁹ fn. 53 の PD では「非真実なもの」と言われている。

⁴⁰ fn. 54 参照。引用されている BhG 2.62 の記述を見る限り、「想像」は、何らかの外界の事物に対して生じるものであると考えられる。

⁴¹ PDī 120,7-9 (on PD 4.50): **prāṇ nivāraṇaṃ** kimartham iti, ata āha — **bodhasiddhaya** iti.

対する有資格者 (adhikārin) の持つ資格 (adhikāra) としての実現手段のなかに、欲望に対する静穏と想像に対する精神集中が含まれている⁴² ことである、というのである。

さらに、真実を理解した後にも、それら教示書に由来しない二種の二元世界は、生前解脱の成立のために捨てられるべきであると述べられている。この記述は、一度真実を理解した者であっても、再び欲望等や想像といった煩悩が生じてきてしまうことが念頭に置かれたものであろう⁴³。

tatra līṅgam āha — śama iti. yatas tattvabodhāt prāk tayor heyatvaṃ tata eva nityānityavastuvivekādbrahmajñānasādhaneṣu madhye śāntaṃ samāhita iti padābhyāṃ śāntisamādhī śrūyete ity arthaḥ (【問】前に排除されるべきであるとはどういう意味か、という [問いがある] ので, 【答】それ故に答える。理解の成立のために, と。そのことに対する証印を述べる。静穏, と。真実の理解の前に, それら [二つ] は捨てられるべきであるので, まさにそれ故に, 常住な実在と無常な実在との識別等というブラフマンの知の諸実現手段の中で, 静まった, [精神を] 集中した, という [二] 語によって, 静寂と [精神] 集中とが言及される, という意味である)。

⁴² 実現手段について、アドヴァイタ学派の思想家サダーナンダ (Sādānanda, 1600 年頃) による学説綱要書 *Vedāntasāra* (VeS) には以下のように述べられている。VeS 9,1-2: sādhanāni nityānityavastuvivekehāmutrārthaphalabhogavirāgaśamādiṣaṭkasampattimukṣutvāni (実現手段とは、常住な実在物と無常な実在物との識別、現世と来世の利益という果報を享受することに無関心であること、静穏等という六つからなるものを備えること、解脱を求めるものであることである)。静穏と精神集中していることとは、「六つからなるものを備えること」(ṣaṭkasampatti) のうちの二つである。VeS 10,21f.: śamādayas tu śamadamoparatititikṣāsamādhānaśraddhākhyāḥ (一方、静穏等とは、静穏・制止・停止・忍耐・[精神] 集中 (samādhāna = samāhitatva) ・信頼と言われている)。さらに静穏と精神集中についてはそれぞれ以下のように述べられている。VeS 11,1-13,5: śamas tāvat śravaṇādivyatiriktaviṣayebhyo manaso nigrāhaḥ ... nigrhītasya manasaḥ śravaṇādau tadanugūṇaviṣaye ca samādhīḥ samādhānam (まず、静穏 (śama) とは、聴聞等とは別の諸々の対象から思考器官を制御することである。…… [精神] 集中 (samādhāna) とは、制御された思考器官が、聴聞等に対して、またそれに随順する対象に対して集中していることである)。ここでは、対象に対する欲望や怒り等といった、激しい教示書に由来しない二元世界に対して、対象から内的器官を制御する静穏が、想像という穏やかな教示書に由来しない二元世界に対して、対象に内的器官が集中している状態である精神集中していることが、それぞれそれらを除去するものとされているのであると考えられる。

⁴³ この点に関連する議論が PD 4.66 に見られる。PD 4.66: vikṣipyate kadācid dhīḥ karmaṇā bhogadāyīnā / punaḥ samāhitā sā syāt tadaivābhyāsapātavāt // (ある時に、統覚は享

眞実を理解していたとしても、欲望等の煩悩という束縛を持つ者⁴⁴は解脱者ではないため、生前解脱を実現し生前解脱者になるためには、教示書に由来しない二種の二元世界を、眞実の理解を達成した後も捨て去らなければならないというのである。つまりは、教示書に由来しない二種の二元世界は、眞実を理解する前であっても後であっても、当の生き物（個我）がその肉体を捨てて離身解脱（videhamukti）を達成するまでは常に捨て去らなければならないということである。

3.2 個我によって創出された世界の除去の手段

では、個我の束縛の原因である、個我によって創出された世界を取り去るためには、どうしたらいいのであろうか。個我によって創出された二種の世界のうち、教示書に由来する世界は、それ自体が教示書に由来しない世界を除去するための実践過程のうちにあり、また眞実の理解に至るまでは保持されるべきものである。そのためここでは、教示書に由来しない

受をもたらす業によって散乱する[とすると、]同じその時、繰り返しが鋭敏になるので、それ（統覚）は再び集中するはずである）。以下の PDi も参照。PDi 125,28-33 (on PD 4.66): evaṃ nirvṛttikasya cittasya prārabdhakarmanā vikṣepe sati tatpratīkāropāyaḥ ka ity apekṣāyām āha — **vikṣipyata** iti. **bhogapradena prārabdhakarmanā buddhiḥ kadācid vikṣipyate** cet tarhi **sā buddhir abhyāsadārḍhyāt tadaiva punar api samāhitā syād** ity arthaḥ （【問】以上のように[涅槃に]達成している心が、発動した業によって散乱する時、それ（心の散乱）を阻止する手段はどういったものか、という[問いに対する答えが]期待されるので、【答】答える。散乱する [以下を註釈する]。享受を与える発動した業によって、統覚器官はある時に錯乱する、とすると、そうだとすると、それ、すなわち統覚器官は、繰り返しが堅固となるので、同じその時、また再び集中するはずである、という意味である）。

⁴⁴ PDi によれば、PD 4.51 における欲望等は束縛の原因ではなく、束縛そのものと考えられているようである。PDi 120,17f. (on PD 4.51): **kāmādirūpo yaḥ kleśaḥ sa eva bandhas tena yuktasya baddhasya muktatā jīvanmuktatvaṃ na hi nāsty evety arthaḥ**（欲望等をあり方とする煩悩、同じそれが束縛であり、それ（煩悩である束縛）と結合した者、すなわち束縛された者は、解脱した者であること、すなわち生前解脱した者であることは、実にはない、すなわち決してない、という意味である）。しかし、欲望等である個我によって創出されたものは束縛の原因であると言われているため、「欲望等という煩悩による束縛」というように“kleśa”を具格の格限定複合語で解釈した方が PD の原意に近い可能性もある。本稿ではひとまず PDi の解釈に従っている。

世界を除去するための方法が問題となる。以下ではこの点について考察したい⁴⁵。

まず PD 4.38 においては個我によって創出された世界の二種の区別なく議論が行われている。すなわち、束縛の原因が個我によって創出された世界、すなわち内的器官にある享受対象の形相であるとする、その内的器官の活動を抑制してしまえばいいのでヨーガを行えばよく、真実の理解、すなわちブラフマンの知は必要ない、という反論が提起され、PD 4.39 でヴィディヤーラニヤがその反論に対して返答をしている。

PD 4.38-39:

bandhaś cen mānasadvaitaṃ tannirodhena śāmyati /
 abhyased yogam evāto brahmajñānena kiṃ vada // 38 //
 tātkaḷikadvaitaśāntāṃ apy āgāmijanikṣayaḥ /
 brahmajñānaṃ vinā na syād iti vedāntaḍḍimaha // 39 //

【反論】思考器官による二元が束縛であるとする、それ(思考器官)の抑制によって[思考器官による二元は]寂滅する。したがって、ヨーガのみを繰り返すべきである。ブラフマンの知の必要性を[君は]述べよ。

【答】[ヨーガによって]一時的な二元の寂滅があるとしても、将来の誕生の消滅は、ブラフマンの知なくしてはないだろう、ということがヴェーダーンタ(ウパニシャッド)の声高な主張である。

ここで反論者が述べている「ヨーガ」とは、パートンジャラ・ヨーガ(Pātañjalayoga, 八支ヨーガ aṣṭāṅgayoga)のことであると考えられる。というのも、パートンジャラ・ヨーガの根本経典 *Yogasūtra* (YS) 1.2 に見られるヨーガの定義は「ヨーガとは心の活動の抑制である」(yogaś cittavṛttinirodhaḥ) というものであり、ここでの文脈に一致するからである。反論者は、内的器官(思考器官、心)による二元が束縛であるというのなら、その内的器官の活動を抑制することによってその二元はなくなるの

⁴⁵ 実際、教示書に由来する世界の除去の方法は述べられていない。おそらくは真実の理解の実現の後、真実を理解するための教示書そのものが必要とされなくなるため、自然と教示書に由来する世界の除去が達成されるのであろう。

で、内的器官の活動の抑制を目的とするヨーガのみを繰り返すべきであって、アドヴァイタ学派が解脱に必要であると主張するようなブラフマンの知はそもそも必要ない、というのである。

以上の反論に対して、ヴィディヤーラニヤは以下のように返答している。すなわち、ヨーガによって確かに内的器官による二元世界はなくなるが、それは一時的なものであって絶対的な解脱の境地ではない⁴⁶。そのため、ヨーガを繰り返したとしても、輪廻転生の世界から解脱することはできず、将来また誕生することになる。それを防ぐために、ウパニシャッド⁴⁷はブラフマンの知が必要であると教えている、というのである。なお、このブラフマンの知の獲得の方法は、教示書に由来する二元世界を確認した際に見られた、教示書に対する聴聞・思惟・瞑想（śravaṇamananānididhyāsana）である。

また PD 4.58 においては、教示書に由来しない個我によって創出された二種の世界のうち、激しいものの放棄の原因、つまり放棄の手段が述べられている。その点について以下で確認する。

PD 4.58:

kāmyādidoṣadṛṣṭyādyāḥ kāmādityāgahetavaḥ /
prasiddho mokṣasāstreṣu tāt anviṣya sukhī bhava // 58 //

欲望対象等に諸過失を知覚すること等⁴⁸が欲望等の放棄の諸原因で

⁴⁶ PDī 117,11f. (on PD 4.39): yogena kiṃ dvaitopāśamas tātkaḥ ucyata ātyantiko veti vikalpyādyaṃ aṅgīkṛtya dvitīyaṃ dūṣayati (ヨーガによる二元の寂滅は、一時的なものと言われるのか、あるいは絶対的なもの [と言われるのか]、と構想して、第一を承認してから、第二を非難する)。

⁴⁷ PDī では以下の ŚveU を引用している。PDī 117,15-18 (on PD 4.39): **tātkaḥ** keti. “jñātvā devaṃ mucyate sarvapāśaiḥ //” (ŚveU 1.8 etc.) “jñātvā śivaṃ śāntim atyantam eti //” (ŚveU 4.14) “yadā carmavad ākāśaṃ veṣṭayiṣyanti mānavāḥ / tadā devaṃ avijñāya duḥkhasyānto bhaviṣyati //” (ŚveU 6.20) ityādiśrutiṣv anvaṇavyatirekābhyāṃ brahmajñānād eva bandhanivṛttir abhidhīyata iti bhāvaḥ (一時的な [以下を註釈する]。「神を知ってから、全ての縄から解放される」「シヴァを知ってから、絶対的な寂静に達す」「人々が、なめし皮のように虚空を巻き上げるであろう時、神を認識しないで、苦の終わりがあるであろう」等という天啓聖典において、肯定的随伴と否定的随伴によって、ブラフマンの知のみからの束縛の消失が表述されている、ということである)。

⁴⁸ PDī 123,21-23 (on PD 4.58): **kāmyāḥ** kāmānāviṣayāḥ sragādaya **ādayo** yeṣāṃ dveṣyādīnāṃ

あると、解脱〔を教示する〕諸教示書において周知されている。〔君は〕それらを探求して、幸福な者となれ。

欲望等という、教示書に由来しない二元世界のうちの激しいものを放棄する原因、つまり手段は、その欲望等の対象にある無常性等の諸過失⁴⁹を知覚することというのである。例えば、花環等が欲しいと思った際に、その花環等は、いつかは壊れてなくなってしまうことを知ることで、その花環等に対する欲望がなくなる、ということである⁵⁰。また PDī によれば、教示書に由来しない二元世界のうちのもう片方の想像が、外界の対象を持っていたとしてもそれと実際に対応しない、あるいはおそらく外界の対象を持たなくとも成立する、自由な単なる内的器官の活動であり非真実なものである⁵¹のに対して、ここでの欲望対象等とは、欲望等という個我によって創出されたものに実際に対応している、主宰神によって創出された外界の事物であると考えられる。外界の事物を対象として欲望を抱くが、その外界の事物が無常であるといった諸過失を知覚することで、その対象に対する欲望がなくなるのである。そして以上のことの根拠⁵²は、解脱を教示する諸教示書であると言うのである。

一方、教示書に由来しない二元世界のうちの穏やかなものである想像に関しては、まずヴィディヤーラニヤは、欲望等は不幸の原因となるため

te **kāmyādayaḥ**, **teṣāṃ ye doṣā** anityatvasātiśayatvādayaḥ, **teṣāṃ dṛṣṭir** avalokanam **ādyam** yeṣāṃ kopasvarūpavicārādīnāṃ te tathoktāḥ (ある嫌悪されるべきもの等にとって、諸の欲望対象、すなわち欲望の諸対象である花環等が始まり (ādayaḥ) である、それら (嫌悪されるべきもの等) が諸の欲望対象等であり、それら (欲望対象等) に、諸過失、すなわち無常性 (anityatva)・過剰性 (sātiśayatva) 等があり、ある怒りを本質とするものを考察すること等にとって、それら (欲望対象等にある諸過失) を知覚すること、すなわち見ることが始まり (ādyam) である、それら (怒りを本質とするものを考察すること等) がそのように (欲望対象等に諸過失を知覚すること等) と述べられた)。

⁴⁹ 諸過失が具体的に何を意図しているかについては fn. 48 参照。

⁵⁰ fn. 48 参照。

⁵¹ fn. 53 の PDī 参照。当該の PDī は反論者の主張箇所であるが、ヴィディヤーラニヤも想像が対応する外界の対象を持たない非真実なものであることは否定していない。

⁵² PDī 123,23 (on PD 4.58): **teṣāṃ kāmādityāgahetutve pramāṇam āha — prasiddha** iti (それら (欲望対象等に諸過失を知覚すること等) が欲望等の放棄の原因であることに対する認識根拠を述べる。周知されている、と)。

放棄されるべきではあるが、想像は非真実なものであり、存在していても害はないのでその放棄は望まれていないという反論を提示し⁵³、それに対して、想像は間接的に欲望等を生み出し不幸の原因となるので放棄する必要があると応答する⁵⁴。その後、想像の放棄の手段に関して⁵⁵以下のよう述べる。

PD 4.61-62:

śakyam jetum manorājyaṃ nirvikalpasamādhitaḥ /

susampādaḥ kramāt so 'pi savikalpasamādhinā // 61 //

buddhatattvena dhīdoṣasūnyenaikāntavāsinā /

dīrghaṃ praṇavam uccārya manorājyaṃ vijīyate // 62 //

構想を欠いた三昧（nirvikalpasamādhī）に基づいて、想像は克服され得る。それ（構想を欠いた三昧）も、構想を伴った三昧（savikalpasamādhī）によって次第に完成する。

真実を理解した、統覚の過失を欠いた、独りで過ごしている者によっ

⁵³ PD 4.59ab: tyajyatām eṣa kāmādir manorājye tu kā kṣatiḥ / 【反論】 この欲望等は放棄されるべきである。一方、想像に対する消滅とは何か）、PDī 123,33f. (on PD 4.59): nanu kāmādīnām anarthahetutvāt tyājyativam astu. manorājyasya tv atathātvāt tattyāgo nāpekṣita iti śaṅkate 【反論】 欲望等は、不幸の原因であるので、放棄されるべきものに違いない。一方、想像は非真実なものであるので、それを放棄することは期待されていない、と [反論者は] 反論する)。

⁵⁴ PD 4.59cd-60: aśeṣadoṣabījatvāt kṣatir bhagavateritā // 59cd // dhyāyato viṣayān puṃsaḥ saṃgas teṣūpajāyate / saṃgāt saṃjāyate kāmāḥ kāmāt krodho 'bhijāyate // 60 (= BhG 2.62) // 【答】 全ての過失の種子であるので、主によって [想像の] 消滅が説かれた——諸対象を考えている人に、それら（諸対象）に対する執着が生じる。執着から欲望が生じる。欲望から怒りが生じる）、PDī 124,3-11 (PD 4.59cd-60): sāksād anarthahetutvābhāve 'pi paramparayā taddhetutvāt tyājyativam evety abhipretya pariharati — aśeṣeti. paramparayā-narthahetutvapradaśanaparam bhagavadvākyam udāharati — dhyāyata iti 【答】 直接的には不幸の原因ではないけれども、間接的に [想像は] それ（不幸）の原因であるので、放棄されるべきものに違いない、ということを用意して、[反論を] 排除する。全ての、と。間接的に不幸の原因となることを示すことを目的とする、主の言明を例示する。考えている、と)。

⁵⁵ PDī 124,15-18 (on PD 4.61): tarhy asya manorājyasya kaḥ parihāropāya iti, ata āha — śakyam iti 【問】 そうだとすると、この想像を排除する手段はどういうものであるのか、という [問いがあるので]、【答】 それ故に答える。可能であると。

て、長時間、聖音が唱えられてから、想像が克服される。

まずヴィディヤーラニヤは、構想を伴った三昧 (samādhi, 精神集中) から構想を欠いた三昧, その構想を欠いた三昧から想像の克服という次第で想像が除去されると述べる。ここでいう構想を伴った三昧と構想を欠いた三昧とは、パートンジャラ・ヨーガの体系における有相三昧 (saṃprajñātasamādhi) と無相三昧 (asaṃprajñātasamādhi) のことである。無相三昧において内的器官は如何なる形相も持たず活動も停止しているため、想像も消えてしまうということである⁵⁶。そしてその無相三昧を完成させるために有相三昧を行う必要があるということである。

続いてヴィディヤーラニヤは、ヨーガに従事していない者による想像の克服の手段を述べるが、「真実を理解した者」(buddhatattva) とは、PDī によればブラフマンとアートマンの同一性という真実を理解した者、つまりはブラフマンの知を獲得した者のことである。また、「統覚の過失を欠いた者」(dhīdoṣaśūnya) とは、欲望や怒り等という内的器官の過失を欠いた者、つまり教示書に由来しない、激しい二元世界を除去した者のことである。以上のような者であって、また孤独な場所に独りで過ごしている者は、長い間、聖音オームを唱えることで想像を除去することができるというのである⁵⁷。

⁵⁶ YS と *Yogasūtrabhāṣya* (YSBh) における無相三昧の定義は以下のようである。YS 1.18: virāmapratyayābhyāsapūrvāḥ saṃskāraśeṣo 'nyaḥ (他のもの(種子を欠いた無相三昧)は、停止の誘因の修習に基づく、潜在印象が残ったものである), YSBh 86,6 (on YS 1.18): sarvavṛttipratyastamaye **saṃskāraśeṣo** nirodhaś cittasya samādhir asaṃprajñātaḥ (全ての[心的]活動が停止している時、[心に] 潜在印象が残った、心が抑制された[状態であること]が無相三昧である)。

⁵⁷ 以上の考察は以下の PDī を参考にした。PDī 124,25-27 (on PD 4.62): **buddhatattveneti. buddham** avagataṃ **tattvaṃ** brahmātmāikyalakṣaṇaṃ yena sa **buddhatattvaḥ**, tena kāmakrodhādibuddhidoṣarahitenaikāntavāsinā vijanadeśanivāsaśīlena puruṣeṇa **dīrghaṃ** śaḍdvādaśādīmātropetaṃ **praṇavam** onkāraṃ **uccārya manorājyaṃ vijīyate** vinivāryata ity arthaḥ (真実を理解した者によって[以下を註釈する]。その者によって真実, すなわちブラフマンとアートマンの同一性を特徴とするものが理解された, すなわち了解された, その者が真実を理解した者であり, その, 欲望や怒り等という統覚器官(buddhi)の過失を欠いた, 独りで過ごしている, すなわち孤独な場所に住むことを性向とする人によって, 長く, すなわち六や十二等のマートルを備えて, 聖音, すなわちオー

ここで、眞実を理解した者にとっての想像の克服の手段が述べられているということは、PD 4.50 において、教示書に由来しない二種の二元世界の両方が、眞実を理解する前に排除されるべきであると述べられていたことと矛盾しているように思われる。しかし、続く PD 4.63-65 においては、聖典 *Yogavāsiṣṭha* (YV) を典拠に、眞実を理解し、内的器官に過失がなく、孤独な生活を送り、かつ想像を克服した者が解脱者であることが述べられており⁵⁸、また PD 4.51 では、眞実を理解した後に、生前解脱の実現のために、教示書に由来しない二種の二元世界が捨てられるべきであると述べられていた。そのため、眞実を理解した者にとって想像の克服の手段が述べられているということは、それが生前解脱の境地を達成する手段であるということであろう。そのため、聖音オームを長時間唱えることは、眞実を理解した後に生前解脱の実現のために想像を除去する手段であり、眞実を理解する前には、構想を欠いた三昧、つまり無相三昧が想像を除去する手段であり、また眞実の理解の実現手段であると考えられる。また PD 4.66 においては、生前解脱者にも心の散乱 (**cittavikṣepa*) が起こり得るため、その心の散乱を防止するために心の集中 (*samāhitā*) が引き続き要求されることが述べられている⁵⁹ので、無相三昧は、眞実を理解した後に想像を除去する手段とも考えられていることとなろう。

また、眞実の理解の実現手段と眞実を理解した後の生前解脱の実現手

ム音が唱えられてから、想像が克服される、すなわち除去される、という意味である)。しかし、聖音オームを長時間唱えることで何故想像が除去されるのかは不明瞭である。聖音オームに対する念想が意図されている可能性もある。この点については今後の研究課題としたい。

⁵⁸ PD 4.63-65: *jīte tasmin vṛttisūnyam manas tiṣṭhati mūkavat / etat padam vasiṣṭhena rāmāya bahudheritam // 63 // dṛśyam nāstīti bodhena manaso dṛśyamārjanam / sampannam cet tadutpannā parā nirvāṇanirvṛtiḥ // 64 (= YV, Vairāgya 3.6) // vicāritam alam śāstram ciram udgrāhitam mithaḥ / samtyaktavāsanān maunād ṛte nāsty uttamam padam // 65 (= YV, Sthiti 57.28) // (それ(想像)が克服されると、愚か者のように、思考器官は活動を欠いたままである。この境地は、ヴァシシュタ [仙] によってラーマ [王子] に多様に説かれた。見られるものは存在しない、という理解によって、思考器官からの見られるものの除去が完成する場合、それ(見られるものの除去)の生起は、最高の滅(涅槃)の達成である。教示書が十分に考察され、長く相互に取り上げられた。潜勢力が全く捨てられること [なくして、また] 沈黙行なくして、至高の境地(解脱)はない)。*

⁵⁹ fn. 43 参照。

段の二段階が考えられているという点は、PD 4.51 の記述の通り、欲望等の除去の場合にも適応されるであろう。このことを裏付けるかのように、真実を獲得した後に想像を克服した者が生前解脱者であるという文脈にある PD 4.65 (=YV, Sthiti 57.28) に対する PDī において、内的器官の活動の沈黙、すなわち想像を完全に捨てることだけではなく、欲望等の潜勢力とを完全に捨てることなくして解脱はあり得ない⁶⁰と、真実を理解した後に欲望等を捨てるということも述べられている。そのため、想像の除去だけでなく、欲望等の除去に関しても、真実の理解の実現手段と生前解脱の実現手段の二段階が想定されていると考えることができる。

しかし、ここで注意しなければならないのは、真実の理解の実現手段としてであれ、生前解脱の実現手段としてであれ、欲望等と想像という、教示書に由来しない二元世界を除去する手段は、直接的にはブラフマンとアートマンの同一性という真実を理解させるものではなく、間接的にその真実の理解を実現させるものであるということである。この真実を理解させるのは、あくまでブラフマンとアートマンの同一性を教えているウパニシャッド文献群等の諸教示書の聴聞等である。さらに、ブラフマン以外の、主宰神によって創出された二元世界の無常性等という諸過失を教示しているのはウパニシャッド文献群であり、また聖音オームについて教示しているのもウパニシャッド文献群を含む天啓聖典である。そのため、欲望等や想像自体は教示書に由来しない二元世界ではあるものの、間接的にウパニシャッド文献群等の諸教示書によって排除されるものであるということもできよう⁶¹。

⁶⁰ PDī 125,19-21 (on PD 4. 65): *kiṃ cādvaitasāstram atyartham vicāritam tathā parasparam guruśiṣyādisaṃvādadvārā cirakālam pratyāyitam ca. evaṃ kṛtvā kiṃ niścitam iti, ata āha — samptyakteti. samyakparityaktakāmādivāsanān manasas tūṣṇīmbhāvād ṛte 'dhikah puruṣārtho nāstīti niścitam ity arthaḥ* (さらに、不二 [を教示する] 教示書が、よく考察され、また同様に、長い間、相互に、すなわち師と弟子等が会話することによって確信された。【問】以上のようにして、何が確定されたのか、という [問いがあるので] 【答】それ故に答える。全く捨てられること、と。欲望等の潜勢力が全く完全に捨てられること [なくして、また] 思考器官の沈黙なくして、卓越した人間の目的はない、ということが確定された、という意味である)。

⁶¹ しかし、諸教示書によらなくとも、外界の世界を観察することによってその無常性等の諸過失を知覚することで欲望等を除去したり、またブラフマンの知を教示しない

結論

以上、PD 第四章を検討することで、主宰神によって創出された世界と個我によって創出された世界について、それらがどのようなものであるのか、これら二つの関係はどのようなものであるのか、ということに関して、ヴィディヤーラニヤがどのように考えているのかを明らかにしてきた。また個我によって創出された世界に関して、ヴィディヤーラニヤは、それが個我にとっての輪廻転生世界への束縛の原因であると考えていることも明らかにしてきた。さらに、個我によって創出された世界の除去の方法についても概観してきた。ここで PD 第四章において個我がどのように輪廻転生世界へ束縛され、どのように解脱すると考えられていたのかを整理したい。

まず、個我である享受主体（認識主体）が主宰神によって創出された外界の二元世界を知覚することで、個我によって創出された教示書に由来しない二元世界、すなわち外界の二元世界に応じた、それらに対して内的器官に生じる欲望等という形相たる激しいものと、外界の二元世界に対するものではありません。必ずしもそれに対応していない内的器官に生じる想像という形相たる穏やかなものが生じる。これらのうち、激しい教示書に由来しない二元世界は直接的に個我を束縛し、また穏やかな教示書に由来しない二元世界は、激しい二元世界を生じさせるので、間接的に個我を束縛する。

そしてその束縛を脱して解脱するためには、ブラフマンの知、すなわちブラフマンとアートマンとの同一性の知、不二の知を獲得することが必要である。そのためにはブラフマンの知を教えている諸教示書に対する聴聞・思惟・瞑想が必要であり、その際に諸教示書の教示内容を形相とする、教示書に由来する個我によって創出された二元世界が生じる。したがって、ブラフマンの知という真実の理解はこの教示書に由来する二元世界から生じるということになる。しかし、真実が理解された後には、教示書に由来する二元世界はその必要性がなくなるため、それは捨て去られ

ヨーガの諸教示書による無相三昧によって想像を除去したりすることができるので、ブラフマンの知を教える諸教示書のみが欲望等と想像を除去する間接的な手段であると言うことはできないことも確かである。

ることとなる。

また、真実を理解するために、教示書に由来しない二元世界を除去する二種の手段が遂行される。欲望等という激しい二元世界を除去するためには、主宰神によって創出された外界の世界に対する無常性等という過失を知覚すること、想像という穏やかな二元世界を除去するためには、精神集中（三昧）、特に無相三昧がそれぞれ遂行される。さらに、激しい二元世界や穏やかな二元世界は、不二という真実を知らなければ完全に除去できず、束縛の原因が残っているので完全な解脱に達することができない。そのため真実を知った後にも、外界の世界に対する無常性等という過失を知覚することや、無相三昧、あるいは聖音オームを長時間唱えることが遂行される。また、真実を理解した後にも、内的器官の散乱等が起こり得るので、その防止のためにも教示書に由来しない二元世界の除去の手段が遂行される。そうすることで、その者は生前解脱者となることのできるのである。

以上のように、諸個我の輪廻転生世界への束縛とそれからの解脱は、主宰神によって創出された外界の世界に惹起されたものではあるものの、直接的には個我によって創出された世界、すなわち内的器官にある諸形相の有無に依存するものである。そのため、ある個我が解脱に至ったとしても、その時はその個我にとっての個我によって創出された世界が消滅するだけであり、他の諸個我にとってのそれぞれの個我によって創出された世界と、外界の世界である主宰神によって創出された世界は依然存在し続ける。特に主宰神によって創出された外界の世界は、延々と創造・存続・破壊を繰り返すこととなる。PDにおいて明言されているわけではないが、主宰神によって創出された外界の世界が完全に消滅するのは、その外界の世界を享受する全ての個我が解脱を達成した時であると考えられる⁶²。

⁶² 主宰神は、外界の世界を個我の享受のために創出したと言われる。例えば以下の記述を参照。PD 1.18: *tamaḥpradhānaprakṛtes tadbhogāyeśvarājñayā / viyatpavanatejo'mbubhuvo bhūtāni jajñire* // (暗質が優勢な原質から、彼（個我）の享受のために、主宰神の主宰力によって、虚空、風、火、水、知という諸元素が生じた）、PD 1.26: *tadbhogāya punar bhogyabhogāyatanajanmane / pañcīkaroti bhagavān pratyekaṃ viyadādikam* // (彼（個我）の享受のため、更に、享受されるものの享受の場所を生み出すために、主は、虚空等を、個別に五重にする)。

略号・一次文献

- ANU *Amṛtanādopaniṣad: Upaniṣadāṃ samuccayaḥ*. Ed. Hari Nārāyaṇ Āpte (Ānandāśrama Sanskṛt Series 29) Pune: Ānandāśrama 1899.
- ABU *Amṛtabindūpaniṣad*: See ANU.
- BABUBhV *Bṛhadāranyakopaniṣadbhāṣyavārttika* (Sureśvara): *Shri Sureshvaracharya's Brihadaranyakopaniṣad Bhashyavartikam Vol.1 (I & II Chapters) With the Commentary Shastraprakashika of Shri Aanandagiri Acharya*. Ed. Shri S. Subrahmanya Shastri (Advaita Grantha Ratna Manjusha Ratna 23) Varanashi: Mahesh Research Institute 1982.
- BAU *Bṛhadāranyakopaniṣad: The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*. Tr. Patrick Olivelle. New York: Oxford University Press, Inc. 1998.
- BhG *Bhagavadgītā* (Vyāsa): *Srimad-Bhagavad-Geeta: Containing Eight Commentaries of Keshava Kashmiri Bhattacharya called Tattva-Prakashika, Madhu-Soodan Sarasvati called Goodhartha-Deepika, Shankaranand called Tatparya-Bodhini, Shreedhara Swami called Subodhini, Sadanand called Bhawa-Prakasha, Dhanapati Soori called Bhaṣhyotkarsh-Deepika, Daivadnya Pandit Surya called Paramartha-Prapa, and Raghavendra called Artha-Samgraha Vol. 1-3*. Ed. Shastri Jeevarama Lallurama, Mahadeva Gangadhar Bhakre and Dinker Vishnu Gokhale. Bombay: The Gujarati Printing Press 1912-1915.
- MuU *Muṇḍakopaniṣad*: See BAU.
- PD *Pañcadaśī* (Vidyāranya): *Pañcadaśī of Vidyāranya with commentaries Padadīpikā by Rāmakrishna and Pūrṇānandakaumudī by Achutaraya Modak*. Ed. R. S. Godhalekar. Pune: Jagad Hitecchu Press 1880.
- PDī *Padadīpikā* (Rāmakṛṣṇa): See PD.
- ŚveU *Śvetāśvataropaniṣad*: See BAU.
- VeS *Vedāntasāra* (Sadānanda): *Vedanta-Sara (The Essence of Vedanta) of Sadananda Yogindra*. Ed. and Tr. Swami Nikhilananda. Calcutta: Advaita Ashrama 1931 (10th impr.: 1997).
- YS *Yogasūtra* (Patañjali): *Yogasūtrabhāṣyavivaraṇa of Śaṅkara Vol 1-2*. Ed.

and Tr. T. S. Rukmani. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. 1998-2001.

YSBh *Yogasūtrabhāṣya* (Vyāsa): See YS.

YV *Yogavāsiṣṭha* (Vālmīki): *The Yogavāsiṣṭha of Vālmīki: With the commentary Vāsiṣṭhamahārāmāyaṇatātparyaprakāśa Part I-II*. Ed. Wāsudev Laxman Śāstrī Paṇṣīkar. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press 1937 (3rd ed.).

参考文献

Brinkhaus, Horst. 2016. “Cosmogony in the Transition from Epic to Purāṇic Literature.” In *On the Growth and Composition of the Sanskrit Epics and Purāṇas: Relationship to Kāvya, Social and Economic Context*. Ed. Ivan Andrijačić and Sven Sellmer. Zagreb: Croatian Academy of Sciences and Arts, pp. 117-133.

Dhole, Nanda Lal., trans. 1899. *Panchadasi of Srimad Vidyaranya Swami*. (Sri Garib Das Oriental Series No. 317) Calcutta: 2nd ed., Delhi: Sri Satguru Publications 3rd ed.

Goodding, Robert Alan. 2002. “The Treatise on Liberation-in-Life: Critical Edition and Annotated Translation of The *Jīvanmuktiviveka* of Vidyāraṇya,” Texas: The University of Texas. (Doctoral Thesis, Unpublished).

Joshi, Veneemadhava-Shastri B. 2008. *Vidyāraṇya’s Contribution to Advaita*. Delhi: Parimal Publications.

Mahadevan, T. M. P. 1938. *The Philosophy of Advaita*. Delhi: Bharatiya Kala Prakashan, 1st Revised ed. 2006.

Nachane, Sulochana A. 2000. *A Survey of Post-Śaṅkara Advaita-Vedānta of S. A. Nachane*. Ed. R. K. Panda. Delhi: Eastern Book Linkers.

Prem Pahlajrai. 2005. “The Authorship of the *Pañcadaśī* and the Textual Context of its *Tṛptidīpa-prakaraṇa*.” Washington, D.C.: University of Washington. (Doctoral Thesis, Unpublished).

Shastri, Hari Prasad., trans. 1954. *Panchadashi: A Treatise on Advaita Metaphysics by Swami Vidyaranya*. London: Shanti Sadan, Repr. 1982.

Swāhānanda, Swāmī., trans. 1967. *Pañcadaśī of Śrī Vidyāraṇya Swāmī*. Madras:

Sri Ramakrishna Math.

Takahashi, Kenji. 2018/19. “Reconsidering the Developments of the Accounts of Creation and Dissolution in the *Mānavadharmasāstra* 1 and *Mahābhārata* 12.224-225.” *Journal of Indological Studies* 30/31: 129-171.

定方晟. 2011. 『インド宇宙論大全』 春秋社。

中村元. 1989. 『シャンカラの思想〔インド哲学思想第5巻〕』 岩波書店（新装版：2012）。

眞鍋智裕. 2025. 「「個我による創出説」とバクティ理論の関係」『北海道大学文学研究院紀要』 第175号: 1-24.

渡瀬信之. 1990. 『マヌ法典——ヒンドゥー教世界の原型』 中公新書（再刊：法蔵館文庫，2025）。

Aspects of Views on the World and Human Nature in Ancient and Medieval India

Edited by Hideki TESHIMA

April 10, 2026

Issued by

Institute for Research on Humanities, Kyoto University (Joint Research Project “Evolution of the Indian Ontology in the Cyclic Image Focusing around the Development Process from Ritualistic Thoughts to Philosophical Views”)

Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501

古代・中世インドにおける世界観と人間観の諸相

手嶋英貴・編

2026年4月10日発行

発行者 京都大学人文科学研究所（共同研究「インドにおける『循環的存在論』の形成——祭祀思想から哲学への発展を中心に」）

〒606-8501 京都市左京区吉田本町